

富士見・上陽希望小学校との22年間の交流及びこれからの交流のあり方に関する考察

富士見市日本中国友好協会理事

前富士見・上陽希望小学校友の会秘書長 紫関 伸一

□ 突然届いた残念な知らせ

それは突然の知らせだった。山西省の協力者である賈利軍さん*1から「校長は昨日から他の学校に勤務している。学校は閉まった。」というメールが届いた。2021年9月2日のことだった。既に恒例行事として定着してきている富士見・上陽希望小学校と富士見市立ふじみ野小学校との学童間の年賀状交流事業に関し、進め方をふじみ野小学校と協議するなど、そろそろ翌年の準備を始めようとしていた矢先のことだった。1999年の開校から22年目にして、そして関係者が多数出席して盛大に举行された2019年9月23日の開校20周年記念式典からわずか2年後の、富士見・上陽希望小学校のあっけない幕切れだった。

もっともそのメールを受け取ったとき、突然ではあったが唐突という印象は受けなかった。なぜならこの10年近く、上陽村を訪れるたびに「そう遠くない日に“その日”はやって来るかもしれない」と感じさせる状況の変化をずっと見続けてきたからだ。年々在校生は減少し村民の高齢化が進む一方で、人が住まなくなった家や朽ちかけた家屋が目につくようになるなど、それほどこの農村にも共通する状況であった。同時にそれは、日本の農村において先行して見られた現象でもあった。だからこそ私たちは上陽村を訪問の都度できる限り時間をとって忻州市や五台县*2の教育関係者と面会し、上陽希望小学校や上陽村の状況を確認し合い市や県からの支援をお願いしてきていたのだった。

□ 富士見・上陽希望小学校はこのようにして建設された

富士見市日中友好協会（以下、「市協会」という。）が希望小学校を建設しようとしたのは、先行して取り組

*1 賈利軍さん；山西省国際旅行社の元社員。2006年から市協会の訪問団を担当。08年～09年に山西省国際交流員として埼玉県伊奈総合学園高校、和光国際高校などで中国語を教える。コロナの影響で、特に旅行業はその多くが経営困難に陥ったが、中でも中国人の海外旅行と外国人旅行者の受け入れを主要業務とする山西省国際旅行社は解散を余儀なくされ、全社員に対して解雇通告がなされた。その後経営形態を見直し体制も縮小して新組織として再出発することができて現在に至っている。賈利軍さんは、解雇通告の前に自主退社。その後、太原の高校の教師となって忙しい日々を送っている。

*2 忻州市、五台县；中国の地方行政は日本のような「地方自治の本旨に基づいた組織ではなく、完全に縦割り制となっている。村の行政権は郷のそれに含まれ、郷は県に、県は市に、市は省の行政の一部として機能している。

みを始めた埼玉県日中友好協会（以下、「県協会」という。）に刺激を受けてのことである。時は1996年5月、埼玉県自治体訪問団の一行が山西省を訪れた。公式行事を終え、ホテルへの帰路の大型バスの中で、添乗員兼通訳として同行していた黄玉雄さん*³が農村の子どもたちの厳しい教育事情と、その子どもたちを支援するための「希望工程*⁴」というプロジェクトの話をした。黄さんの熱心で誠実な語り口に訪問団員が感銘を受けたことが発端となって、帰国後、県協会は児童の学費支援と小学校建設に取り組み、翌1997年9月、山西省榆社県白北郷に白北希望小学校が開校した。この一連の経緯は富士見・上陽希望小学校開校十周年記念誌「友好交流、相互理解、そして平和（以下、「十周年記念誌」という。）に「中国『希望工程』への協力（NPO法人 埼玉県日中友好協会 副理事長 菊地正泰）」として詳しく紹介されている。

「希望工程」プロジェクトにより、市協会を含む県内各地の友好団体や個人によって山西省に建設された希望小学校は、1996年から1999年までのわずか3年の間に10校を数える（「埼玉県内団体・個人による中国山西省への学校建設支援状況」／1999年4月20日県協会作成）。そのうち2010年頃までの比較的早い時期に7校が閉校している。中国政府が主導した撤点閉校*⁵という「改革」の大きなうねりの中、やむを得ないことではあるが、寄付をした当事者からは残念な結果と言えなくもない。その一方で、学生数の適正規模の議論はさておき、一定規模の学生数を擁する学校で教育を受けることができるようになった学生にとっては良い面もあると考えられる。村から学校が消えてしまった村民の教育に対する関心はどうなっているのだろうかという点も気掛かりだ。教師の意欲に十分応えられる環境が整っているかどうかその学校の教育内容を大きく左右する。いずれにしても教育に対する評価は一面で捉えることは難しい。歴史の中で、学生を中心に据えて検証されるということだろう。

*³ 黄玉雄さん；山西省国際旅行社の元社員。日本部の部長だった1999年の開校式訪問から市協会の訪問団を担当。副社長に就任した2006年、添乗などの実務は賈利軍さんに交代したが、可能な限り上陽村へは同行した。2015年の定年退職以降は個人の立場で、市協会や友の会の共同事業者として支援を惜しまなかった。旅行社としては後任の耿非祥社長が社の立場から関わっている。

*⁴ 希望工程；中国政府は都市部と農村部の教育格差、農村部の財政的困難等の対策として、1987年、それまでの改革経験を踏まえて「農業教育総合改革」に着手。1989年には中国青少年発展基金会在設立され、民間資金の活用を含めた大規模な改革が全国的に広まった。具体的には、政府は教員の質と人数を確保するための諸制度の改革、後に示す農村の教育費負担の軽減などを進め、民間資金では農村貧困地域における教育環境整備と貧困家庭の子どもへの教育援助が進められた。「希望工程」はおもにこの民間資金による事業を指す。

*⁵ 撤点閉校；2001年に国務院が定めた「基礎教育の改革と発展に関する決定」により推進された施策。従来の1村1小学校1郷1中学校では財政の効率的運用の面から支障があり、教育設備や教員の配置などに地域間格差が生じていたため、その解決策として農村の学校を併合する措置を講ずることとなった。判断はそれぞれの県に任されていたが、五台県は、上陽小学は希望工程により建設された学校であり日本の小学校と交流しているという特殊性から、対象から外す措置がとられた。

なお残りの3校は、静楽県の静楽坂戸友好希望小学校と五寨県新寨村の五寨県新寨联校、そして我らが五台县上陽村の富士見・上陽希望小学校である。このうち1998年10月に完成した静楽坂戸友好希望小学校は2017年9月に、1999年6月開校の富士見・上陽希望小学校は2021年8月をもって閉校となった。唯一残っているのは五寨県新寨联校で、1998年9月以来24年の歴史を刻んでいる(2022年10月現在)。このように埼玉県内の団体・個人によって農村に建てられた希望小学校は、大きな歴史のうねりの中で、山西省においては姿を消しつつある。

話を市協会の取り組みに戻そう。

県協会の取り組みが一段落した1997年夏、市協会は独自の希望工程小学校建設と学費支援の募金活動を開始することを決定。同年9月1日発行の市協会会報「こんにちは你好」第12号に、募金活動の第一弾として、翌年1月にチャリティコンサートを開催する旨の記事を掲載した。またコンサート終了後の1998年2月11日発行の「こんにちは你好」第13号では、協会会員及び有志に向けて市川宏治会長(当時)が「日中友好条約締結20周年を記念し、中国の僻地に日中友好富士見希望小学校の建設を実現したい」と協力と支援を呼びかけた。これを機に会員が奮起して募金集めに奔走し、取り組みはいよいよ本格化したのであった。

これと並行して山西省側の窓口である山西省人民対外友好協会(以下、「対友協」という。)との協議もこの間に着々と進められた。中でも建設候補地の選定については様々な角度から慎重に検討、協議がなされた。対友協の管存恕秘書長と劉晋凌副秘書長(いずれも当時)は①長年経済的に貧しい地域であること②学齢期の子どもたちが一定数存在する地域であること③子々孫々中日友好のお付き合いをしていくことのできる場所であること(具体的には、車両通行が可能な道路があること、それほど遠くないところに宿泊施設があることなど)を基準として実際に数か所の候補地に足を運ぶとともに、私たちの希望にも真剣に耳を傾けながら選考を進めてくれた。その結果、省都である太原市から北東に約200キロメートルの位置にある上陽村が最有力候補地として市協会に提示された。1998年6月8日付けの対友協の報告書によれば、「五台县豆村鎮上陽村は山西省の北東部に位置し、仏教聖地の五台山*⁶の中心部である台懷鎮より25キロ離れています。村は太原から五台山への通過地点にあります。240世帯716人の人口があり、1423畝の農地を持っています。

*⁶ 仏教聖地の五台山 ; 中国には仏教聖地と呼ばれる霊場がある。山西省五台县の五台山(文殊菩薩の霊場/世界文化遺産)、四川省樂山市の峨眉山(普賢菩薩の霊場/世界文化遺産)、安徽省池州市の九華山(地藏菩薩の霊場/世界ジオパーク)、浙江省舟山市の普陀山(観音菩薩の霊場)の四大名山である。五台山が最も繁栄した時期には、300以上の寺が林立していたといわれる。現在でも、台内に39カ寺(南山寺、顕通寺、塔院寺、碧山寺、普化寺、龍泉寺、金閣寺など)、台外に8カ寺(仏光寺、尊勝寺など)で、合計47カ所の寺院が存在する。世界文化遺産登録は2009年。最澄の弟子で第三代天台座主の圓仁慈覚大師(794—864年)が五台山での修行の様子を綴った『入唐求法巡礼行記』は日本人による最初の本格的旅行記であり、時の世情をいまに伝える歴史資料としても高く評価されている。なお尊勝寺は上陽村に最も近く、約6km離れ、五台山への旧道に面している。また日本の植物学の父と言われる牧野富太郎が子ども時代によく採集に出かけ、現在は高知県立牧野植物園がある山も同名の五台山である。

村は農業を中心にし、一人当たり年間収入は500人民元(日本円にして8000~9000円)です。現在、小学校は一つで教師が6名、6つのクラス、生徒数が110名あります。長年経済的な困難のため、学校は危険そうな寺院を使用しています。」というものであった。また同時に、新設しようとする学校の規模と必要経費が示された。必要経費とは材料費のことであり、建設作業は村民がボランティアで実施することも記載されていた。

これは後に訪問した際に村長や村の役員、村民から直接聞いた話だが、村は標高約1,300メートルの黄土高原にあり、雨量が少なく寒冷地ということもあって収穫可能な農作物はきびや燕麦、とうもろこしなどの雑穀類と豆類、ジャガイモなどに限られている上、収穫量も少ないということであった。彼らが着ているものからも生活の厳しさは十分に伝わってきた。

ともあれ上陽村は、太原市からは遠く不便な地ではあるが、仏教聖地の五台山台懷鎮に西側からアクセスする唯一の主要道路の沿道に位置していること、五台山には観光客用の宿泊施設もあって、開校した後に私たちが学校を訪問する際の宿泊先として利用可能であることなど、候補地としての最低限の条件は整っていた。

このようにして学校の建設に関する諸々の事項が具体的になり、あとは市協会の判断を待つばかりの状況となった。そして1998年7月7日、市協会の須藤弘子常任理事と鏑木廸子理事の2名が直接現地を見て判断を下すという重要な任務を背負って、対友協に田錫釗副会長、管存恕秘書長、劉晋凌副秘書長を訪ね、市川宏治会長の親書とともに建設資金の一部、180万円を手渡した。その翌日、果たして両理事は上陽村に赴き建設予定地を見学するとともに、閻金蓮校長、胡軍偉村長らの関係者にも面会することができた。こうした実況見分を経て帰国した彼らの報告を聞いた理事会は最終判断を下し、8月31日に残りの180万円を送金。以後、建設は順調に進んだのであった。

希望工程のもう一つの事業である「貧困家庭の子どもに対する学費支援事業」は、経済的な事情により就学することができない家庭の子どもへの学費を提供するというものであった。地域差はあったと思われるが、山西省では1人の学生が6年間の在学中に必要な費用は日本円にして6,000円と定め、支援者を募集した。そして上記の訪問に合わせて、学生25人分の資金を持参し、7月7日に初回分として山西省希望工程弁公室の項果花副主任に手渡した。市協会では支援を受ける子を「里子」、支援金拠出に協力される方を「里親」と呼び、以後も継続して支援者を募った。その結果、2006年までに132名の里親によって224名の里子を支援することができた。また数年に一度、その里子を尋ねてはその状況を里親に知らせるというきめ細やかな活動を、市協会中島正也事務局長(当時)を中心に進めてきた。この事業も市協会の大きな柱の一つであるが、本稿の目的からは逸れるので詳細は省くこととする。

□ いよいよ交流へ——助走期の取り組み

さて、以上の経過を経て建設された希望小学校は「中日友好富士見・上陽希望小学(以下、「上陽小学」という。)」と命名されて、1999年6月1日の児童節の日に開校式が盛大に挙行された。この開校式には富士見市から市協会会長の市川宏治団長をはじめとする23名の会員及び市民からなる訪問団が参加した。早朝に太原のホテルを出発したバスは約半日をかけて初夏の陽光を受けて輝く新しい上陽小学に到着しようとしていた。とそのとき、太鼓の音がかすかに聞こえたかと思うと、あっという間にその音は腹に響く大きな音とな

った。上陽小学の学生が、楽団の演奏に合わせて叩いていたのである。それは太鼓の音とともに、訪問団員の心に感動を運んできたようであった。バスを降りると、初夏とはいえ標高の高い黄土高原特有の、紫外線が肌に突き刺すように痛く感じられる上陽村であったが、真新しい白いタイル張りの校舎と緊張した面持ちの学生たちを前にして、とても爽やかに晴れがましいひとときであった。上陽村は胡軍偉村長を先頭に老若男女村民総出で訪問団を迎え入れ、満面の笑みで感謝の気持ちを表した。

式典と交流の時間は瞬く間に過ぎ、興奮冷めやらぬ訪問団員が後ろ髪を引かれる思いでバスに乗り込むと、小学生と村民らは別れを惜しむように大きく手を振った。やがてバスはゆっくりと動き出し、宿泊先である五台山台懐鎮の友誼賓館に向かった。バスの中では、訪問団員の誰もが抑えきれない感動で、感想を思い思いに語り合っていた。とそのとき、須藤弘子副団長が団員に呼びかけた。

「建物はできましたが設備や備品はまったく不十分でしたね。教育環境を整えるためにはまだまだ私たちの援助が必要なようです。それから、経済的な援助だけではもったいない。あの素晴らしい笑顔の人たちと交流を続けていきませんか？そのためには上陽小学に関することに的を絞って事業を展開する『友の会』といったような新たな組織を作って、もっともっと大勢の皆さんと一緒に支援と交流を続けていくようにしてはどうでしょうか！」

訪問団員の反応は極めて明瞭であった。バスの中は好意と賛意に満ちた大きな拍手に包まれたのであった。この時の訪問団員の手記の一部は、市協会会報「こんにちは你好」第16号に収録されている。

訪問団が帰国した後の1999年6月27日、市協会は富士見市立鶴瀬西公民館において訪問報告会を開催した。そして、この場で改めて友の会の結成を提案し、名称を「富士見・上陽希望小学校友の会」（以下、「友の会」という。）とすること、運営にあたる中核の組織として世話人会を置くことなどが参加者全員の賛成により承認され、ここに正式に発足をした。さらにチャリティコンサートや開校式訪問写真展の開催などの当面の事業についても併せて確認。こうして友の会は精力的に動き始めることとなった。

このように広く市民に向けた事業と並行して進めたものに、友の会の中核的な存在としての世話人や市協会の役員、両会の会員らを対象とした学習活動がある。市川宏治会長の旧知の友人の曲維先生（遼寧師範大学副校長兼国際交流学院長）が来日した折に「中国の教育事情を聞く集い」を開催したり、日本の敗戦後も長いこと太原に残り国共内戦と中華人民共和国の建国をつぶさに見てきた小松崎輝一さん（埼玉県日中友好協会常任理事）の連続講座を開くなどである。

また、富士見市教育委員会の理解を得るための働きかけも積極的に進めた。赤坂勲教育長（当時）に開校式訪問の報告をして上陽小学に関心を寄せていただくとともに、児童間の交流のため、市内小学生の書道作品を短期間のうちに集めていただき、10月には上陽小学に送ることもできた。翌2000年2月には上陽小学から返礼の書道作品が届くと、富士見市内の小学校12校での巡回展示もしていただいた。こうした経験を経て、また山西省側からの要望もあって、より親密な交流ができ顔の見える交流への第一段階として友好姉妹校を選定していただきたいとお願いしたところ、1カ月も経たないうちに「ふじみ野小学校を選定した」との返答をいただいた。さっそくふじみ野小学校に伺い、吉田邦彦校長（当時・初代）と具体化のための協議を行った。20数年を経た今日でも、ふじみ野小学校の児童には「友好姉妹校」としての自覚が受け継がれているのは、選定後の初期段階での校内での位置づけとそれを大切に受け継いでこられたふじみ野小学校の努力が大きく

影響しているものと思われる。

以上が友の会結成直後にとりくんだ活動基盤を確立するための諸行動である。

□ まだまだ続く支援活動

次に上陽小学建設から今日に至るまでの諸事業の概要を記す。

校舎以外の施設面では、2001年に暖房設備と水道施設を100万円で、2009年には校庭の整備を116万円余で実施した。

机と椅子は旧上陽小学のものをそのまま使っていたため、極めて粗雑で、しかも不揃いであった。黒板はなく、壁に墨で黒く塗ったところを黒板代わりにしていた。そこで2006年、独立行政法人都市再生機構の鶴瀬団地再開発事業に伴い富士見市立鶴瀬西小学校が統合・建て替えとなることを機に市教育委員会に学校備品の提供をお願いしたところ、快く許可をいただくことができた。児童用机130個、同椅子106脚、教師用机5台、折りたたみ椅子35脚、身長計1台、黒板5枚、黒板拭き20個、その他ノート、チョーク、用紙類など多数の消耗品で一杯になったコンテナが横浜港から海路で天津港へ、そこから先は陸路上陽村へと届けられた。村では多くの村民有志と学生たちが力を合わせて届いた荷物を校舎に運び入れたという。

実はこのとき、荷物の受け渡しのため市協会の須藤弘子副会長と中島正也事務局長（いずれも当時）が太原市に滞在していた。ところが天津港の税関では執拗なチェックがかけられてなかなか通関できないというトラブルが発生。残念なことに時間切れとなった両氏は、受け渡しの場に立ち会えないまま帰国せざるを得ない状況となってしまった。ところがそのとき、たまたま駐日本中国大使館勤務を終えて一時帰国をしていた対友協の劉晋凌さんが「電話では埒が明かない」と直接天津港の税関に赴き、懸命の説得の末ようやく通してもらうことができた。しかし時すでに遅く市協会の2名の役員は既に帰国の途についたという情報を受けた劉さんはそのまま上陽村に向かい、私たちに代わって荷物の搬入まで見届けてもらうというエピソードまでついた、まさに大仕事であった。

さて、卓球と言えば中国のお家芸であるが、上陽村のような山村では学校で卓球をする機会には全くと言っていいほど恵まれていない。そこで2008年、山西省太原市出身の卓球プロコーチ鄭慧萍さん*7に相談したところ、快くその仕事を引き受けてくれた。鄭さんは太原市のスポーツ用具を扱う店に正規品の発注をし、さらに上陽小学への搬送の手配をした。そして、太原市に住む鄭さんのご両親には代金及び送料の立替払いを連絡して、無事卓球台一式は上陽小学に届けられたのであった。鄭さんならではの、いや、鄭さんだからこそ実現した上陽村の子どもたちへの大きなプレゼントとなった。後日、立て替えていただいた代金等をお渡しするため、太原市の鄭さんのご両親のご自宅を訪ねると、私たちの来訪を大変に喜んでくれた。お母さん手作り

*7 鄭慧萍さん；中国ナショナルチームで活躍した後、来日。全日本社会人卓球選手権大会女子シングルスと同女子ダブルスで優勝。また全日本卓球選手権大会女子ダブルスと同混合ダブルスで優勝。福原愛選手コーチ、大正大学卓球部コーチなどを歴任。公益財団法人日本スポーツ協会公認スポーツ指導員卓球コーチ。富士見市の各中学校の卓球部の指導、ふじみ野小学校での体験談話者としても貢献された。

の昼食をお腹いっぱい、美味しくご馳走になった後は、お父さんから鄭さんの思い出話をたくさん聞かせていただいた。鄭さんがまだ小さかったころ、お父さんは仕事が始まる前と仕事が終わった後に鄭さんの練習に毎日付き合ったこと、中学生になるとナショナルチームの一員として寮生活に入ったため家を出たのでとても寂しい思いをしたこと、中国の国内だけでなく日本に行ってから大活躍した鄭さんを誇りに思っていることなど、ご両親が愛情のすべてを鄭さんに注いでこられた歴史を熱く楽しく語って下さった。こうした方々だからこそ、私たちの相談事を快く引き受けてくれたのだと、そのときに腑に落ちた気がしている。

これらの費用は友の会会員の会費と寄付金、市協会の会計からの拠出などによって賄われたが、中でもチャリティコンサートは絶大な貢献をした。のべ6回のコンサートはすべて演奏家である古澤奈々子さんらが準備から当日の運営の段取りまでの一切を担ってくださった。

その他教育用備品等で比較的コンパクトにまとめて持ち運べるものは、訪問の際に直接持参した。日本の習字セット、CDラジカセ、バドミントンセット、バレーボール、サッカーボール、英漢辞典、漢英辞典、地球儀、教室用掛け時計などなどである。リコーダーと鍵盤ハーモニカは広く市民の方々から提供を受けて持参した。ソフトボールセットは地域の朝野球の会からいただいた。こどもフェスティバル実行委員会は市内のすべての小学生に向けて、フェスティバル当日に上陽小学の友だちに贈る学用品を持ち寄ろうと呼びかけた。支援の輪は全市的な事業にまで広がっていったのだった。

また、学生たちに身近な学用品や日本の菓子類は、訪問の都度持参をして学生や見学の村人にプレゼント。大変に好評であった。

□ 幅広い交流事業へ

訪問交流事業では、1999年の開校式訪問を含めて、COVID-19のパンデミック直前の2019年の開校20周年記念訪問まで、訪問団の派遣は11回のべ170人、事務局派遣の訪問が6回のべ16人で、合計18回のべ186人が参加した。訪問時には富士見市に伝わる民話の紙芝居の上演、竹トンボや紙ヒョウキを作って飛ばして遊ぶ、富士見市の小学校の写真やビデオを見てもらうなど、日本文化の紹介にも力を入れた。

学生—児童間の交流は、習字作品、絵、年賀状、絵手紙など、児童（学生）の手作り作品を交換して進めた。富士見市には当時、小学校が12校あり、交流と言っても人数が余りにも多過ぎて趣旨が不明確になることが懸念されたため、赤坂勲教育長（当時）と協議して友好姉妹校を選定していただくことになった。その結果、上陽小学と同じ1999年の4月に開校した富士見市立ふじみ野小学校が友好姉妹校と決定した。またふじみ野小学校では上陽小学の児童数などを考慮して、ほぼ同数の児童数をもつ5年生にその交流の役割を担ってもらうことを自主的に決定した。

こうして始まった相互の交流は、2021年の春まで続いた。累計で、ふじみ野小学校ではのべ2000人の児童、上陽小学ではのべ501人の学生がこの交流事業に参加した。交換された作品はふじみ野小学校からは2079点、上陽小学からは1159点に上る。

このような交流の状況を市民に知ってもらうための活動にも力を注いできた。「訪問団写真展」、「上陽小学校児童作品展」など独自の発表の場はもちろんのこと、ピースフェスティバル、こどもフェスティバル、国際

交流フォーラム、市民大学祭といった全市規模の事業、公民館まつりなどの地域事業、そして市協会が主催したり友の会と共催して開催する事業など、可能な限りの発表活動に取り組んだ。その回数は90回を数える。

□ 活動基盤確立のための努力

様々な事業の中心となる友の会の組織活動にも地道に取り組んだ。会費や寄付金を拠出していただく会員はのべ206人に達した。このうち市協会の会員は約4分の1の53人であり、その3倍にあたる153人はそれ以外の方々ということになる。ではなぜそのような構成となったのだろうか。それは、新たな会員を増やそうという会員自身の努力は言うまでもないが、同時に、「子どもたちの支援や交流のお手伝いができるなら…」と、それまで市協会との接点が無かったか、有っても極めて薄い方々にも共感が広がっていったことを示していると言えるのではないだろうか。

会員と世話人会とをつなぐ不定期発行の機関紙「しゃんやん」と、同じく不定期に発行される情報紙「しゃんやん通信」は、合わせて50回発行している。さらに開校十周年記念誌（A4判63ページ）及び開校二十周年記念誌（B5判83ページ）は、上陽小学の状況をより詳しく理解する際の手助けとして大いに役立てられたと思う。

中国の教育制度や農村部の教育実態などを学ぶため開催した学習会や講演会、中国理解を深めるための中国映画上映会など、会員交流事業（チャリティコンサートを除く）は25回開催している。

すべてを網羅して示すことは困難なためこの程度にするが、上記事項を概観しただけでも実に様々な事業を展開してきたことが見て取れるのではなかろうか。

□ 20年を超える交流の意味は

先に述べたように、7割の希望小学校が建設後10年ほどで閉校しているのに比べ、上陽小学校をはじめとした3校はなぜこれほど長期にわたって存続できたのだろうか。もちろん各学校によりその条件は異なるので単純比較はできないが、いくつかの要因が働いて20年を超えてなお残り続けたと見て良いだろう。そして在校生の数だけでなく村の状況、近隣の農村の状況などに目を向けていくと、私たちの思い入れや期待ともかけ離れたところで、もっと大きな何か——すなわちそれは国の地域政策、農業政策及び教育政策など^{*8}の実施にもかかわらず社会経済状況の移り変わりに伴って生じた村民の意識の変化＝以前は都市部への出稼ぎで家

^{*8} 国の地域政策、農業政策及び教育政策など；前出の「基礎教育の改革と発展に関する決定」（2001年）では徹点閉校が推進されたが、一方で農民、農民家族への直接的な対策も施された。2003年の税制改革により実施された農業税の廃止は画期的なものだった。また「三免一補」といって教科書代、教育雑費、文房具代の三つの費用を免除したり、半寄宿生（小学生）と中学生困難児の生活費補助も行われた。これらの措置は村によってその導入時期に早い遅いが生じた。上陽村は2009年頃から実施されたが、それ以前にも訪問団は村の中に学校に来ていない子はいないか状況を確認しては校長に改善を求め、県教育局の特別の措置で通学できるようになった子もいる。無料の給食も2013年から提供された。

計をやりくりしていたが、家族そろって転居したほうが、2倍とまではいかななくても妻の賃金収入も家計に繰り入れることができたうえに、子どもにもより充実した教育を受けさせることができるようだ＝というものが村や学校の存廃に少なからず影響している様子が見えてきた。そうであるならば、上陽小学が長期にわたって存続できた理由や原因を探ったとしてもあまり意味をなさないだろう。したがってここでは、この間の交流が私たちにもたらしたものは何だったのかについて考えてみることにしたい。

まず第1としては、富士見市教育委員会及びふじみ野小学校と、友の会及び市協会との関りの深化が挙げられよう。教育行政と初等教育の現場で国際交流という大きなテーマが明確に位置づけられたこと、その交流事業に私たち民間団体が常に関与し不定期ながらも情報交換の場を設けてきたことなど、全国的に見てもそう多くはない特異な事例ではないだろうか。こうした歴史に関わったすべての人々にとって、この20年余の経験は特別に貴重なものであったことを確認しておきたい。

第2は、中国側の各級機関との緊密な信頼関係を確立することができたという点だろう。交流を始めて間もないころは、最初に希望工程プロジェクトに関する情報を提供してくれた山西省の国際旅行社と非政府組織である山西省人民対外友好協会の2者で、彼らは最後まで大きな力を注いでくれた。そして交流を重ねるごとにそうした団体は増していった。山西省政府の外事僑務弁公室、忻州市や五台県の教育局や外交部門、旅游部門など中国国内でも両校の交流を支えようという機運が広がっていった。同時に、組織に関わりなく個人として協力してくれる人々も少なからず現われたことを記憶にとどめておきたい。

第3としては市協会の活動の幅が広がったことだろう。上陽小学の交流と支援に特化して事業を展開する友の会を結成したことにより、市協会が直接関与しなければならぬ事業量が大幅に減少することとなった。その結果、中国料理教室、中国映画会の定例化、チャイナサロン、芋ほり交流会など、新たな会員交流事業を次々と展開してきた。市協会の今後の発展の足掛かりとなるかもしれない。

□ 子どもたちにとって20年余の交流は何だったのか

以上見てきたように、組織上の観点からは関係団体・機関の広がりや信頼関係の深化が顕著に進んだと言える。それでは交流の当事者である児童・学生にとってはどうだったのだろうか。私たちは識者の文中にその意味と課題を見出すことができるだろう。

まずは、玉川大学の朱浩東氏^{*9}が十周年記念誌に寄せた一文から見てみたい。氏は中国における教育史の視点から上陽小学校の学生を見て次のように希望を見出している。

➡ 十九世紀後半、ヨーロッパ近代の発展にならぬ、中国にも欧米のような教育制度を築こうという動きが中国の沿海部都市に見られた。二十世紀のはじめの「新式学堂」は、近代以来中国における初等教育改革の草分けとなり、その後中華民国の誕生とともに、初等・中等・高等学校として形を整えた。(…中略…) 財政予算を多く必要とする学校そのものの建設は一部の経済先進地を除いて、

^{*9} 朱浩東氏 ; 社会学博士。一橋大学助手を経て玉川大学文学部教授。2014年4月から同大学教育学部教授。日本教育学会、異文化比較教育学会、日中教育研究交流学会会員。

二十世紀後半の時点においても十分に進展しなかった。(…中略…) 古い歴史の伝統を持つ中国にとっては、知識を尊ぶ風土は存在するものの、庶民の手元に系統的知識を届けることはまったく新しい試みであった。そのために多くの優れた先達が人生そのものを捧げ、また国をあげてこの試みに取り組む時期もあった。だが、膨大な人口を抱えた中国の実情から見れば、そのようにしてもまだまだ足りないものがあった。(…中略…) 富士見・上陽希望小学校の子ども達、教員、村の人々と話し、子ども達との遊びにも参加したことは、子ども・学校を育てていくこととは何かを考えさせてくれる貴重な経験であった。遠方日本の友人達に対して、村に育ち育てられた子の素朴さ故の照れや恥じらいの場面も見られたが、心からの歓迎、感謝、自分たちの努力ぶりを見てもらいたい意欲は未来に向けての教育の希望を与えてくれる。上陽村の学校作りはその独自性をもって教育史の中の一ページになるだろう。

中国吉林大学哲学社会学院の李全鵬氏*¹⁰は、二十周年記念誌に特別寄稿された一文で具体の期待感を示された。

➡ (…前略…) 人間は自我あるいは自己の精神世界が先にあって他人と交流するのではなく、反対に他人との交流によって自我あるいは自己の精神世界を形成する生き物である。即ち、人間同士の交流なしでは、人間形成すること自体がありえない。このため、より多彩な交流が人間の体験や知性などを豊かにするのである。(…中略…) 遠い他者が一種の資源として機能し、常に異なる文化や知識を提供し、刺激してくれる。これによって、自分、または所属する社会ないし国、いまの現状、そしてこれからの道は、果たしてオルタナティブがないだろうか、政府や企業、あるいは科学界が主張する「真理」への省察力が涵養されることに繋がろう。(…後略…)

続いてフランス文学者の内田樹氏*¹¹の「サル化する世界」から見てみたい。ストレートな主張が心地よい。

➡ (…前略…) 子どもたちが閉じ込められている狭苦しい「檻」、彼らが「これが全世界だ」と思い込んでいる閉所から、彼らを外に連れ出し、「世界はもっと広く、多様だ」ということを教えること、これが教育において最も大切なことだと僕は思います。(…後略…)

最後は劇作家の平田オリザ氏*¹²の「わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か」から。少し長い引用となるが、他者との触れ合い、交流という一見簡単そうな営みを深いところから捉え直してみたくなる一文である。

➡ (…前略…) 「コミュニケーション教育、異文化理解能力が大事だと世間では言うが、それは別に、

*¹⁰ 李全鵬氏 ; 社会学博士。名古屋大学研究員を経て2014年7月から吉林大学哲学社会学院副教授。

*¹¹ 内田樹氏 ; フランス文学者、翻訳家、思想家、武道家、エッセイスト、神戸女学院大学名誉教授。京都精華大学客員教授。

*¹² 平田オリザ氏 ; 劇作家、劇団「青年団」主宰、こまばアゴラ劇場支配人。大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、四国学院大学学長特別補佐・客員教授、リヨン高等師範学校客員教授などを経て2021年から芸術文化観光専門職大学学長。

日本人が西洋人、白人のように喋れるようになれということではない。(…中略…)だが多数派は向こうだ。多数派の理屈を学んでおいて損はない」この当たり前のことが、なかなか当たり前に受け入れられない。しかし、これを受け入れてもらわないと困るのは、日本人が西洋人(のよう)になるというのには、どうしても限界があるからだ。もしこれを強引に押し進めれば、明治から太平洋戦争に至るまでの過程のように、どこかで「やっぱり大和魂だ!」といった逆ギレが起こるだろう。身体に無理はよろしくないのであって、私たちは、素直に、謙虚に、大らかに、少しずつ異文化コミュニケーションを体得していけばよい。ダブルバインドをダブルバインドとして受け入れ、そこから出発したほうがいい。(…中略…)私たち日本人は、靴を脱いで上がり框に足をかけるとき、脱いだ靴をくると反転させる。しかし、聞くところによると、韓国の方たちはこれを嫌がるらしい。「そんなに早く帰りたいのか」と思うのだそうだ。この現象は、靴を脱いで家に上がるという文化を共有しているからこそ起こる摩擦だろう。(…中略…)「そんなに早く帰りたいのか」と思う韓国人に対して、「そんなふうに悪くともなくてもいいだろう」と日本人は思うだろう。実生活では、この程度で止まっておけば問題がないが、こういった「ずれ」が蓄積し、鬱積し、「だから日本人は信用できない」「韓国人は日本人のことを何でも悪くする」といった一般化が始まるとやっかいなことになる。この小さな「ずれ」が、いくつもの亀裂となって文化摩擦が起こる。だから、そうなる前に私たちは、文化の違いというものを正しく自覚し、またそれを丁寧に丁寧に解きほぐしていかなければならない。(…中略…)「心からわかりあえなければコミュニケーションではない」という言葉は、耳に心地よいけれど、そこには、心からわかりあう可能性のない人びとをあらかじめ排除するシマ国・ムラ社会の論理が働いてはいないだろうか。

□ 新たな交流に活かすべき課題を探る

上陽小学が閉校となり交流の相手がいなくなったことは誠に残念なことであった。だが早くも2022年春、上陽村の子どもが多く通学する豆村鎮の豆村小学との交流が新たに始まった。それを可能にした要因はおもに二つあると見ている。

第1は、ふじみ野小学校及び富士見市教育委員会の「20年を超える交流を途絶えさせてしまうのは忍びない。」「子どもたちも5年生になると交流の日が早く来ることを楽しみにしている。」「ぜひ継続できるようにしていただきたい。」という熱意であろう。こうした声には是非とも応えたいと、私たちは強く感じたのであった。

第2は山西省側の誠実で素早い対応である。省・市・県の連係プレイでもっとも適しているであろうという学校を探し、あっという間に交流の段取りを進めてくれた。

こうして新たな交流が始まった今、あらためてこれまでの取り組みを振り返ると、やり残したことや反省は数限りなく浮かんでくる。それらの中の特徴的な何点かを踏まえながら、また前述の識者の言葉に込められた大きな期待に応える方向を見据えて、これからの交流の中で挑んでみたい課題について考えてみた。

(1) 交流機会の固定化からの脱却の試み

現在の交流事業は長く続いた年賀状交流の影響を受け継いで、交流作品の数を両校で揃えるようにしている。それは、どちらが先に出すかに関わらず、作品を作った人には必ず相手側の学校からの返事が届く

ように配慮された結果であった。そして実質的にその数は、在校生の数が多いふじみ野小学校の5年生が基準となってきた。つまりこの交流活動へは、ふじみ野小学校では6年間の小学生生活の中で5年生時の1回のみ参加となっている。一方、豆村小学は、上陽小学がそうであったように1人の学生が複数枚の作品を制作するか、または異学年の学生が参加することで作品数のバランスを保ってきた。そのため、学生によっては2年続けて、或いは数年に渡って交流事業に参加することとなる。これはこれで学生たちの国際理解を深めるうえで大きな効果を期待できる。が、現在の考え方を継続すれば、ふじみ野小学校の児童は6年間でたった一度しか交流に参加しないことになる。これで十分と言えるかどうかは意見の分かれるところだろう。もちろん一度も経験しないよりは1回でも経験したことの方が遥かに意義のあることだというのは誰も否定しないのではないだろうか。しかし今日の日本の状況、つまり人々が「嫌中」「反中国」の情報をシャワーのように毎日浴び続けている中で、果たしてこれだけでいいのかという疑念を拭き去ることはできない。このシャワーの下、ともすれば「国対国」、すなわち「二国間対立」といった見方に陥りがちな思考パターンに対し、「日本の自分と中国の〇さん」という関係から出発することができないかと投げかける意味は大きいだろう。そのためにも今のままの交流内容で良しとするのか、検討を加える必要があるかもしれない。

(2) 交流内容の柔軟な見直し

交流に参加する個人に焦点を当てた課題とは別に、学校間の交流、世代を跨いだ交流にも目を向けておきたい。上陽小学が閉校したことにより、一般的にはふじみ野小学校との友好姉妹校の関係は自然消滅したと言って良いだろう。だがそう簡単に割り切れるものでもなさそうだ。ことにふじみ野小学校においては何をすることも「友好姉妹校」を上陽小学の前に付して、両校が特別な関係にあることを強調し、関係者の理解を得てきた。こうした努力を無駄にしないためにも、上陽小学に代わる新たな友好姉妹校となりうる学校の選定を山西省側にはお願いしたい。その際、交流内容についてはこれまでの経験を単に踏襲することは避け、双方が無理なく実施できるものを模索し合意することが重要だろう。また、交流体験の継続性という観点からは、卒業生の関与についても検討に値するのではなかろうか。これは、(1)で論じた「交流機会の固定化からの脱却」についても同様のことが言えそうだ。

(3) リアルな交流は夢なのだろうか —— 持ち続けたい実現への希望

社会ではコロナ禍を経て諸事案のリモート化が一気に進んだ。リモートワーク、リモート会議、はたまたリモート講義(授業)といった具合である。しかし昨今は新型コロナの沈静化をにらみ、対面方式が徐々にではあるが復活の兆しを見せている。リモートでは得難い何かにより多くの人々が気づき始めたからだろうか。それとも最初からその評価は変わらないままにコロナの状況を見て動き始めたからだろうか。いずれにしても、リモート・対面のどちらの方式にもそれぞれ一長一短を認めつつ、従来から多くの成果を得てきた対面方式への還流が見られるのが今年の後半に来てからの傾向と言える。私たちの学校間交流でも今年初め、リモート交流の可否について議論が交わされた。設備環境や参加人数、通訳配置の可能性など事前にクリアすべき課題もあって断念したが、従来の方法よりはリアルな交流に一步近づくことは間違いなさそうだ。とはいえ、今後も対面方式の優位性が揺らぐことはないであろう。『百問不如一见(百問は一見に如かず)』は昔も今も、そして中国でも日本でも共通した観念として定着している。

(4) 交流の将来展望

友好姉妹校同士の交流をベースとしつつ、そこを出発点に自発的交流へと段階的に発展できないものかと考えている。なぜならば、「全体の中の一員」であることよりも「您和我」、日本語では「あなたと私」、「君と僕」または…などと、やや面倒な表現となるが、そうした関係の中にこそ双方が理解しあう真の交流へと続く第一歩があるような気がしている。この間のさまざまな交流を見て来てつくづく実感している。学年全体またはクラスといった集団としての交流と個人同士の交流、この巧みな組み合わせをうまく作り出せれば、より実り多い交流が待っているのではないだろうか。

(5) 課題に取り組む条件の整備

以上4点にわたって課題を検討してきたが、その課題に取り組むにあたって注意しておきたい点を記しておく。それはこれまでもそうであったように関係者間における共通認識と合意である。例えば学校には学校ごとの風土があると思う。これまで築き上げてこられた風土を大切にしつつ折り合いをつけていくこと、これは避けて通ってはいけなところだろう。もう一つ目配りを忘れてはならないことがある。一人ひとりの教員の皆さんが置かれている環境の厳しさ、すなわち新たな取り組みに二の足を踏みたくなるような忙しさの中だからこそ、丁寧に相談を積み上げ、一致点を見出して一歩でも二歩でも前進していきたいと思う。すべての関係者が無理なく情熱を注いで取り組むことのできる交流事業、これを追求していきたい。

□ おわりに

本年5月1日(日)、これまで長きにわたってご支援、ご協力をいただいた方々をお招きして「富士見・上陽希望小学校友の会解散記念 さようなら“しゃんやん”アフタヌーンコンサート&思い出写真展」を開催した。1998年から2022年までの25年間を5期に分けて時々の場面を映した写真展では、鬼籍に入られた多くの方々のお顔も見えていただき、懐かしんでいただいた。いま、幾ばくかの寂しさを感じないでもないが、ある種の達成感のような感情が勝っていて、心の底から関係者の皆さんに感謝の気持ちを表すことができたように思う。それはおそらく、上陽小学の閉鎖が中国側の事情によるものであったことが最大の要因だからではあったのだが、同時に、四半世紀という時間の長さ、上陽村の人々との心温まる交流が私たちにもたらす充実感によるところが大きいのではないだろうか。中でも村の高齢者が抱いてきた日本人の印象が私たちとの交流を通して180度変わったことは嬉しいことだった。それは旧日本軍が設置したトーチカ^{*13}に対する

^{*13} トーチカ ; コンクリート製の壁で保護された軍事施設の名称。一般に円形や方形などの単純な外形で、全長が数メートルから十数メートル程度のものが多い。銃を使うための最小限の開口部を持ち、部隊の本隊よりも前線に出て数人で監視、銃撃などを行う。土嚢で作った壁の上に丸太類を渡して土を盛り天蓋とするだけでも簡易トーチカとすることができる。上陽村のトーチカがどのようなものであったかは定かではない。上陽村の西側で道路がほぼ直角に曲がっており、東側も南側も良く見通せることから監視に最適な土地として設置されたと思われる。

村人の思い出に関わる話題を通じて私たちにもたらされた。戦争中、旧日本軍は村のすぐ裏手にある高い丘の上にトーチカを築いて数人の兵士が常駐した。その粗暴で強圧的な態度に村の大人たちでさえ恐怖を感じたという。戦後、日本軍が撤退した後も、なかなか泣き止まない子どもたちに対して大人たちは「いつまでも泣いていると日本軍が来るぞ!」と言っては泣き止ませようとしていた。このようにして子供たちの間にも日本人は怖い、恐ろしい、狂暴などといったイメージが広がっていったのだった。村の高齢者は、こうした昔の思い出話とともに「直接会って言葉を交わしたことで、日本人は本当は優しい人たちなのだとということがよく分かった」と訪問した私たちに打ち明けてくれた。「いよいよこれから本物の交流が始まるぞ」と実感した瞬間だった。

前置きが少し長くなったが、友の会が解散したことで、本年2月に始まった豆村小学との新たな交流は市協会が取り組むこととなった。本年は「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」が1972年に発せられ、日中の国交が正常化して50年の節目の年。そして来年は「日本国と中華人民共和国との間の平和条約」が1978年に締結されて45年の節目の年を迎える。この二つの声明、条約に共通する文言がある。「主権、領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に両国間の恒久的な平和友好関係を確立、発展」「相互の関係において、すべての紛争を平和的手段により解決し、武力又は武力による威嚇に訴えない」というものだ。だが近年、これらを忘れたかのような言動が両政府に見られることは誠に残念と言わざるを得ない。こうした今だからこそ「民」の力による未来志向の交流が求められているときはないのではないだろうか。何があっても、約90年前の悲しい歴史を繰り返してはならない。これを中心に据えて交流を展開していきたい。そのためにも友の会の記録誌のタイトルである「友好交流、相互理解、そして平和」を決して手放すことなく堅持していこうと思う。

最後になったが、本稿に登場していただいた多くの関係者の皆様に、また紙幅の関係でご登場いただけなかったすべての関係者の皆様に特別の思いを込めて心よりお礼と感謝を申し上げたい。また本稿の執筆にあたり、山西省人民対外友好協会の席旺華前秘書長さんと張鑫さんには業務多忙のなか、豆村小学との交流開始の手配、希望小学校の現状について調査及び情報提供など絶大な援助をいただいた。あらためて謝意を表したい。

2022年12月10日